

夏が来なかつた時代

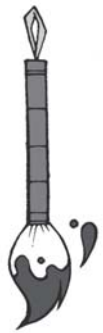
先月号で八代將軍吉宗の時（享保17年から18年にかけて）、近畿地方を中心に全国的に飢饉に襲われ、江戸ではコレラが蔓延し、これを鎮めるために花火を奉納したことについて紹介しました。

実は、被害はこれだけでは収まりませんでした。『日本災異誌』などによるとこの頃は地震や噴火が続けて起こった時代でした。享保17年（1732）1月には3日と13日に江戸で続けて地震が起きています。9月には長崎で地震。この時の記録には昼夜80余回震動とあります。享保18年（1733）4月には京都で地震。6月には浅間山が大噴火し前掛山が崩壊。8月には広島で巨大地震。と記されています。この災害と共に冷夏。イナゴ、ウンカ（稲の害虫）が異常発生し凶作に見舞われました。九州のある藩領内では、餓死者が1万人を超えたとの記録も残されています。これが、教科書などで学ぶ「享保の飢饉」です。

更に厳しいことがこの50年後に起こります。「天明の飢饉」です。天明3年（1783）5月9日に浅間山の噴火活動が活発化し、6月25日に大噴火が起き噴煙は成層圏まで達し、数年に渡り残留した陽光を遮り、気候は寒冷化しました。推定ですが気温は平均1.3℃も下がったと想定されています。この後7月29日にも大爆發。この時は江戸市中の家々の戸や障子がガタガタと鳴り、揺れ動いたと記録されています。8月2日正午頃から3日にかけても

大爆發。その後噴火は間欠的に繰り返され、5日午前8時頃から2時間余り間断なく爆發を繰り返します。空は噴煙で真つ暗となり、まるで夜のようなでした。正午を過ぎて噴火が弱まり始め、午後4時頃になってやっと太陽の光が見えたとあります。この噴火で、浅間山の北側に向かつて幅3里（12km）、高さ1丈（約3m）の溶岩が流れ出しました。この溶岩流は人家も田畑も押し潰し、川に流れ込み洪水を引き起こします。被害は浅間山の北6里（23.6km）四方に及び吾妻郡の51の村が被害を受けました。現在、観光地となっている「鬼押出し」はこの時の形成された溶岩台地です。

昭和54年、嬭恋村の鎌原で発掘調査が行われ、観音堂参道の50段の石段が上15段を残して泥流に埋まった状態で発見されました。石段の途中には中年の女性が老女を背負った状態で発見されました。あと10段ほど登り切れば助かったのですが、残念ながら泥流に飲み込まれ息絶えたようです。この時の記録を信州佐久（現在の長野県佐久市）の住人である佐藤雄右衛門将信が『天明雜変記』として残しています。「この年の夏は雲が多く、寒かった上に浅間山が大噴火し火山灰が厚霜のように降り、畑の野菜はすべて枯れてしまった。9月の彼岸になつても稲の花は咲かず実を付かなかつた。」噴火の堆積物は軽井沢の碓氷峠で15m、高崎で0.5m、吾妻川を塞ぎ止めた泥流は決壊し利根川に流れ込み、前橋近辺に洪水を



下野市教育委員会 文化財課

もたらします。俳人小林一茶も江戸でこの時の異様な状況を記録しています。江戸川に流れ込んだ泥流や大木、倒壊した家屋、遺体などを目撃しています。また、江戸でも5日に強烈な地震や鳴動を体験した記録も残しています。

『夏が来なかつた時代』（桜井邦朋）によると1775年ごろから気候の寒冷化が始まり、1780年以後厳しくなり1820年頃まで続いたとあります。先に気温が平均して13℃下がったと記しましたが、夏の気温が摂氏で0.5℃低いと東北地方は冷害に見舞われ、米が不作となると桜井氏は記しています。佐藤雄右衛門の「この年の夏は雲が多く、寒かった」の記録と科学的データが一致します。さらに『天明雜変記』には「奥羽両国は大飢饉で米価が高騰し、津軽南部あたりでは半年の15〜20倍になり、食糧が不足し多くの庶民は救済もままならず餓死した」と記されています。浅間山やアイスランドのラーキ火山が1783年と84年に大噴火し、噴煙が成層圏まで達し煙霧となって地球を覆ったことで、フランスも小麦とブドウが不作となり、それがフランス革命の引き金となりました。アメリカの独立革命もその発端は1775年とされ、気象の影響が政治に及んだと記されています。

参考文献『夏が来なかつた時代』（桜井邦朋）
2003 吉川弘文館